

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	山田 祐揮
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 日本の臨床研修医が若手指導医を最も信頼することと心理的安全性との関連
	掲載誌 日本病院総合診療医学会雑誌 2025；21：147-156
	主査 古田 繁行 副査 信岡 祐彦 副査 前畑 忠輝
[論文の要旨・価値] 緒言：心理的安全性は、対人関係上のリスクを安心して取れる状態を示し、医療安全やバーンアウト予防に重要である。特に研修医は精神的負担が大きく心理的安全性の確保が求められるが、若手指導医（卒後3～6年目）が心理的安全性へ与える影響に関する研究はない。本研究では、若手指導医との関係が研修医の心理的安全性と関連するかを検討した。方法・対象：2024年7～11月、全国の基幹型臨床研修病院に在籍する研修医を対象に、Google フォームを用いた質問紙調査を実施した。主要評価項目は O' Donovan 心理的安全性尺度（19 項目）の平均値、副次評価項目は同尺度の 3 カテゴリー（リーダー、同僚、雰囲気）の平均値とした。病院要因・研修医要因を交絡因子として収集し、若手指導医を病院単位でクラスタリングしたマルチレベル解析を行った。本研究は聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会の承認を得た。結果：34 病院の 881 名に調査を配布し、191 名（21.7%）から回答を得た。研修医の心理的安全性平均点は 4.2 点（7 点満点中）で、他医療職より低い可能性が示された。若手指導医を最も信頼している研修医は 42.9%であったが、「若手指導医への信頼」と心理的安全性との関連は有意ではなかった。副次評価項目（リーダー・同僚・雰囲気）においても同様に有意差は認められなかった。考察：本研究では、研修医の心理的安全性が相対的に低く、若手指導医への信頼が心理的安全性の高さと関連しない可能性が示された。理由として、①使用尺度が若手指導医の評価に適さなかった可能性（チームリーダーを想定している）、②「信頼」を単一項目で測定した限界、③若手指導医が心理的安全性や教育的役割を十分理解・実践していない可能性が考えられる。若手指導医は near-peer mentor として心理的安全性を高め得る立場であるが、日本では教育研修プログラムが十分普及していない点も課題である。今後は若手指導医の教育スキル向上を図る介入や、心理的安全性・信頼関係を多面的に評価できる尺度の開発が必要である。結語：研修医の心理的安全性は低い可能性があり、メンタルヘルスや研修継続の観点からの改善は喫緊の課題である。本研究では、若手指導医への信頼が心理的安全性と有意に関連するとは限らないことが示された。今後は若手指導医の育成と信頼関係の質向上を目指した取り組みが必要である。	
[審査概要] 2025 年 12 月 9 日 18 時から教育棟 5 階で、主査（小児外科学：古田繁行）と副査 2 名（臨床検査医学：信岡祐彦、消化器内科学：前畑忠輝）が、大平指導教授と総合診療内科医局員数名の陪席の下審査を行った。約 20 分のスライドを用いた発表の後、約 40 分の質疑応答を行った。審査では、(1) 心理的安全性とは、(2) 研修医の抑うつと若手指導医の可能性、(3) 心理的安全性の尺度について（リーダーと若手指導医の言葉の混同など）、(4) 交絡因子の選別と関係、(5) 信頼とは、など多岐にわたる質問が出され、申請者は概ね的確に回答した。本研究の限界を示しつつ（サンプリングバイアス、選択バイアス、未測の交絡因子、回答の正確性など）、今後の展望として「信頼」の具体化と質的研究、研修医の心理的安全性の因子を探索し、研修医支援に活かしたいと力強く締め括った。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 全国 40 施設を対象に研修医のアンケート調査を準備した。心理的安全性の議論は、医療職のみならず様々な職業にまで及んだ。外国語試験として、今回の論文に関連深い「学生の実習における心理的安全性」の最近の知見に言及した英語論文の抄録を読み、自身の考察を述べてもらった。自身の経験から得られた研修医の心理的安全性に関して、仮説とは異なる結果であったが、今後も継続して探求していく姿勢が見られ、学位授与に値すると判断した。	